

家族の神話

作・富田 求

(登場人物)

松本孝子 (38) 弁護士

希 (17) 高校生

樋口一夫 (42) 樋口化工

プロジエクトリーダー

樋口里美 (40) 東京商事 業務開発部長

由佳 (4)

土井浩平 (50) 刑事

塩沢豊 (67) 東都大学 法学部教授

○取調室（夜）

舞台上手に机と椅子がある。

樋口一夫（42）と土井浩平刑事（50）が向かい合って座っている。

土井が、ドンと机を叩く。

取調室が明るくなる。

土井「殺人！何を寝ぼけたことを言っているんだ！」

一夫「由佳は、殺されたのです」

土井「娘さんの死は、すでに事故として処理されている」

一夫「事故ではありません。殺人です。妻が殺したのです」

土井「（フツと息を吐いて）あんた、自分の立場が分かっているのか。妻を脅迫した容疑で、取り調べを受けているんだぞ」

一夫「娘は、まだ4歳だったんです。4歳で殺されるなんて、あまりに理不尽です」

土井「ここに、娘さんの事故捜査報告書がある」

一夫が視線を上げて、土井を見る。

土井「由佳ちゃん4歳は、母親が目を離したすきに、浴室に行き、溺れたとある。由佳ちゃんの体には、虐待の痕もなく、母親の不注意が事故の原因と結論付けている。（資料に目を落とし）事件性を裏付けられるものは何もない」

一夫「事故ではありません！」

土井「幼児の場合、この種の事故はよく起こるんだ。ましてや娘さんには障害があったから」

一夫「事故じゃない！私には分かる。一緒に生活していた私には、分かるんです」

土井「頑なな奴だな」

一夫「・・・」

土井が一夫の調書を見る。

土井「お前が妻を脅迫したのには、別の意味があるんじゃないのか」

一夫「別の意味？」

土井「（調書を見ながら）高校を中退しているのか」

一夫「はい」

土井「ワルには見えないけどな」

一夫「・・・」

土井「妻は、慶応大学を出て、東京商事の業務開発部長、様か。大変なエリートじゃないか。お前、逆タマだな」

一夫「逆タマ？」

土井「今でも、妻からの離婚請求に応じないそうだな」

一夫「・・・」

土井「お前、エリートの妻に未練があるんじゃないのか」

一夫「ありません！」

土井「中卒のお前が、簡単に結婚できる相手じゃないぞ。別れたくないから、嫌がらせに脅迫状を送っていたんじゃないのか」

一夫「私は真実を」

土井「お前もしつこいね。しつこい男は余計嫌われるぜ」

一夫「(首を横に振る)・・・」

土井「まあ、エリート妻への未練も分からはないが、物は考えようだよ」

一夫「・・・」

土井「女房のいない生活は天国だよ。男は、その天国を知らないから、地獄が普段の生活とっているんだ。日本の悲劇だよ」

一夫「確かに・・・辛かった・・・」

土井「そうだろ、そうだろ。分かるよ。分相応ってあるんだ。中卒とエリート妻じゃ最初から釣り合わないよ。俺なんか大学出ていても女房に頭が上がらない。時々女房に殺意さえ感じるよ」

一夫「・・・」

土井「最近、熟年離婚して、男が早死にすると言われているけど、俺から言わせれば、女房と別れて、ホッとして、気が緩んで死んじゃうんだよ。俺なんか、家に帰ってからのの方が、気が張っているよ。いつも女房の顔をうかがっている。だから、取調室の方がリラックスして、ポロツと本音なんか喋っちゃうんだ。そうすると、不思議だね。犯人は、ペラペラ自供し始めるんだよ。それで、署内じゃ落しの土井とか、ママシの土井ちゃんとか呼ばれて恐れられている。おかしいだろ」
土井が一夫の顔を覗き込む。

土井「おかしいだろ」

一夫「・・・」

土井「俺は、本音を喋っただけなんだぜ」

一夫「刑事さんの本音が、相手の心に共鳴したんですよ」

土井「共鳴か、なるほど」

一夫「本当は、犯人も喋りたいんですよ」

土井「(驚いて) そう、そうなんだよ！お前、よく分かっているね。無理矢理しゃべらそうとするからダメなんだ。自分からしゃべりたくするんだよ」

一夫「凄いいテクニクですね」

土井「(自慢げに) 最近じゃ、後輩が、俺のテクニクを盗もうとしているんだ。でも、簡単じゃないよ。犯人と同じぐらいの不幸を背負ってなきゃ相手の心に訴えられないんだ」

一夫「分かります」

土井「分かってくれるの。嬉しいな。やっぱり一夫ちゃんとは気が合う。可愛い恋人や女房を持っている奴なんか、一生俺のテクニクを盗めないよ。自分の人生を犠牲にする覚悟がなきゃ出来ないね。まあ、俺の場合、女房様様だけだね」

一夫「刑事さんは、哲学者ですね。そこまで言い切れる刑事は少ないと思いますよ」

土井「(嬉しそうに) そうかな。嬉しいことを言うじゃないか」

一夫「刑事さん」

土井「刑事さんなんて、水臭いよ。土井ちゃんと呼んでよ」

一夫「土井さん、土井さんには、お子さんはいるのですか」

土井「一夫ちゃんと同じ娘が一人いるよ。これが女房に似てない良い娘でさ。まあ、娘がいるから、結婚生活続けているようなもんだよ」

一夫「だったら、私の気持ちも分かって下さい」

土井「娘を思う一夫ちゃん、の気持ちは、痛いほど分かるよ。でもね、この取り調べは、一夫ちゃんが妻を脅迫した容疑の取り調べなんだ。娘を思う気持ちは、一旦脇に置いてさ」

一夫「(首を横に振って) 妻が、娘を殺したんです」

土井「土井が立ち上がって、一夫に近づく。」

土井「(馴れ馴れしく) だからさ、一夫ちゃん、気持ち切り替えてよ。この取り調べで、エリートに嫉妬して、脅迫状を出したと認めてよ。その方が説得力あるのよ。いい調書書くからさ。こんなの微罪だから、後は俺に任せてよ。中卒の一夫ちゃんを悪いようにはしない。俺は、あんたに同情している」

んだ」

一夫「(きつぱり) 妻が、娘を殺したんです」
土井「(呆れて) あんた、本当に頑なだな」

取調室の明かりが消え、暗闇に。

スポットライトに浮かび上がる一夫。

その一夫に、希の「私は、信じる！」が被る。

スポットライトが消え、舞台中央が明るくなる。

○法律事務所

松本孝子(38)がソファに座っている。娘の希(17)が孝子の周りを心配そうに歩いている。

孝子「少しは落ち着きなさい」

希「お母さん、こんな時に落ち着いてられないでしょ。伯父さんは逮捕されたのよ」

孝子「余計にイラつくのよ！座んなさい」

希がソファに座る。

希「(思いつめたように) 伯父さん、大丈夫なの」

孝子「里美さんをつけ回し、『お前が殺した』と脅迫状を送り続けたのよ。起訴されるかは微妙なところだけど・・・」

希「母さんは優秀な弁護士なんだから、何とか伯父さんを助けてあげて、お願い」

孝子「今、里美さんに、被害届を取り下げるように頼んでいるのよ」

希「あんな優しい伯父さんを訴えるなんて、最低！」

孝子「そんなこと言っている場合じゃないでしょ」

希「どうして、里美さんなんかと結婚したの？」

孝子「里美さんが好きになったのよ」

希「え！本当に」

孝子「伯父さんはね、母さんの為に高校を中退して、工場で働き始めたの。その工場のお嬢さんが里美さんなのよ」

希「そうなんだ」

孝子「伯父さんは、独学で工場に必要な特許をいくつか取っているのよ」

希「すごい」

孝子「結婚した頃は、お似合いの夫婦だったわ。でも由佳ちゃんが生まれてからは、けんかばかり」

希「伯父さんは、由佳ちゃんが殺されたと本気で思っているんだよね」

孝子「本気なのよ。伯父さんは、由佳ちゃんが殺されたと信じている」

希「だったら、母さんが、伯父さんを助けてよ」

孝子「母さんだって、やれることは、やっている」

希「・・・」

孝子「一応伯父さんの言う通り、殺人事件として検察に『告訴』はしたの」

希「・・・」

孝子「でも、受理されなかった」

希「私は、伯父さんを信じる。あの里美さんなら、やりかねないよ」

孝子「証拠がないのよ」

希「伯父さんは、必死で証拠を捜しているのよ。母さんも手伝って上げて。お願い」

孝子「目撃者もないし、犯行を証明するのは難しいわ」

希「私は、伯父さんを手伝うわ」

孝子「子供に何ができるのよ」

舞台がゆっくり暗くなる。

舞台の上手が明るくなる。

○取調室

机の前で、祈るように座っている一夫。

机の周りを歩き回っている土井。

土井「百歩譲って、あなたの言っていることが正しいとして、障害のある娘が邪魔だったという動機だけじゃ逮捕はできないよ。そんなことしたら、世の中殺人者だらけだ。俺だって女房を殺す動機は一杯持っているぜ」

一夫「・・・」

土井「奥さんが殺したという確かな証拠は、あるのか」

一夫「(静かに強く) あります」

土井が歩くのを止めて、席に着く。

土井「どんな証拠だ」

一夫「部屋の中には、妻の里美と由佳の二人だけです。里美しか、由佳を溺死させられない。これが決定的な証拠です」

土井「(呆れて) お話になりませんな。事故の可能性もあるだろ」

一夫「(強く) ありません」

土井「どうしてそう言い切れるのだ！(机をバンと叩く)」

一夫「由佳には精神的な障害がありました」

土井「だから何なんだ」

一夫「水が怖いのです」

土井「水が怖い？」

一夫「絶対に水には近づきません。自分から風呂に入るなんて、考えられません」

土井「それだけの理由で、奥さんを逮捕できないよ」

一夫「事故じゃないのは明白です。犯人は、妻しかありえませんが」

土井「そんな状況証拠では、逮捕できない」

一夫「捜査員にもそう言われました。あとは、何を言っても取り合ってもらえません」

土井「物証がないと起訴できないんだよ」

一夫「(毅然と) 刑事さん、私は気付いたのです」

土井「何を？」

一夫「罪を裁くのは、裁判所だけではない。妻は、正義の裁きを受けなければならぬ」

土井「だからあんたは、奥さんに脅迫状を送り付けたのか」

一夫「脅迫状じゃありません。彼女に、自分の罪を知らせてただけです」

土井「それが脅迫なんだよ！」

一夫「天網恢恢疎にして漏らさず」

土井「中卒なのに、難しい言葉知っているんだな」

一夫「天は、罪人(つみびと)を見逃しません」

土井「(苦笑いしながら) そうかな。俺は、警察に20年いるが、天に見逃された悪人を何人も見て来たぜ。悪い奴ほどよく眠っているぜ」

一夫「刑事さん、刑事さんは、『魂』の存在を信じますか？」

土井「急に何を言い出すんだ。あんたは、宗教家か」

一夫が首に下げた小袋から、白い小石を取り出し、土井に見せる。

土井「何だ、それは？」

一夫「由佳の遺骨の中に、混ざっていた石です」

土井「遺骨の中に石？」

一夫「はい、娘の小さな骨を拾っていると、まるで自分に拾って欲しいというかのように、微かな輝きを放っていたんです」

土井「それで、その石がどうしたというのだ」

一夫「由佳が私に残してくれた『魂』のような気がするんです」

土井「それが魂？偶然、娘さんの遺骨に、混ざったただの小石だと思うよ。まあ、イワシの頭も信心から、とも言うからな」

一夫が小石を握りしめる。

一夫「(首を横に振って)こうしていると、由佳の『魂』が、私の心と共鳴するのです」

土井「あんたね、あんたの境遇には同情するよ。でもそんなちっぽけな石が魂だなんて、あんたどうかしているよ。そもそも魂なんて存在するのかな？」

一夫「(真剣に)人間が死ぬ瞬間、21グラム軽くなると言われています。私は、それが『魂』だと思います」

土井「おっと、また胡散臭いことを言い出したな。21グラム？あんたが計ったのか？」

一夫「1907年に、ダンカン・マクドラルというアメリカの医師が調べています」

土井「ふん、ハンバーガーみたいな奴だな。そいつが、どうやって計ったんだ？」

一夫「死の瞬間を計ったと思います・・・でも、その後実証はされていませんが・・・」

土井「そんなことだと思ったよ。死の瞬間なんて誰も計れないよ。でもな、俺も刑事の割に、人が良いから、あんたが真剣に20グラムぐらいと言ったら信じたかもしれん」

一夫「？」

土井「その21グラムの1グラムが胡散臭いだ。作為を感じる。その中途半端なりアリティは、詐欺師が良く使う手なんだ。4万円足りないというより、38500円足りないと言う方

が、真実味があるだろ」

一夫「・・・」

土井が、一夫の手元を見る。

土井「ちよっと貸してくれ」

土井「(小石をじっくり見ながら) これが魂、なのか・・・(ニヤツと笑って) あんた実は、この小石が21グラムだなんて言うんじゃないだろうね」

土井が、小石を放り投げる。

一夫が、悲鳴を上げて、小石を拾い上げる。

一夫「(真剣に) 本当に、21グラムなんです」

土井「またまた、調子のいいこと言ってる。死の瞬間に消えた魂が、このちっぽけな石に変わったというのか。そんな訳ないだろ。もしそれが事実なら、火葬場は、21グラムの小石だらけになるじゃないか」

一夫「由佳の私への思いが」

土井「おっと、科学とロマンが融合して、この小石になったとでもいうのか。俺は信じられないな」

一夫「(無視して) 魂は、人間の脳内の意識が、作り出した物質なんです」

土井「魂が物質？だったら聞くけどな。あんたと、娘さんの魂は、同じ21グラムなのか？体重は関係ないのか？そんなのおかしいぜ。俺は、体重に比例すると思うぜ。文学部の俺でもそのぐらいは分かる」

一夫「人間の意識は、脳内のニューロンを、量子という物質が移動して作る量子情報なんです」

土井「な、何だ、それは」

一夫「現代物理学の基礎理論である『量子力学』をご存知ですか」

土井「り、量子力学？(動揺する)」

一夫「はい、その量子力学の量子が作り出す情報のことです。その量子情報が、魂を作り出しているんです」

土井「たかだか工員のくせに、何を小難しいことを言っているんだ！いくら温厚な俺でも限度と言うものがあるぞ」

一夫「(無視して) そして、この広大な宇宙空間全体にも、脳内と同じ量子が存在しているのです」

土井「(苛立って)それが、どうしたというのだ。誰が考えても人間の脳と、宇宙じゃ大きさが違いすぎるだろ」

一夫「人間の魂と、宇宙の意識は、同じ物質である量子で繋がり、共鳴し合うのです。だから、天の裁きは、存在するのです。人は、誰でもいつかは報いを受ける。私は、妻が、天の裁きによって、裁かれると信じています」

土井「天の裁き？そんなもんがあれば、警察なんかいらねえんだよ」

一夫「私は、その手助けをしているだけです」

土井「手助け？お前がやっているその手助けが、犯罪なんだ。裁判で裁かれるのは、一夫ちゃん、あんたの方なんだよ」

一夫は、祈るように小石を握りしめて沈黙。

あきれ顔で一夫を見つめる土井。

舞台が暗くなる。

○法律事務所

舞台中央が明るくなる。

孝子と希がソファに座っている。

希「私は、伯父さんを信じる。どんなことがあっても伯父さんを信じる」

孝子「母さんも信じたい。でもこのままだと脅迫状を送ったおじさんの方が犯罪者になってしまうのよ」

希「だったら、どうして伯父さんをもっと助けないのよ」

孝子「助けたい、母さんだって助けたいわよ・・・だって伯父さんは母さんの命の恩人だもの」

希「命の恩人？」

舞台上手に、祈るように座っている一夫がスポットライトに浮かび上がる。

孝子「伯父さんがいなくなったら、母さん生きていかなかった・・・」

希「どうして・・・」

孝子「・・・」

希「おばあちゃんは、どんな人だったの」

孝子「母さんが中学生になった時、階段から落ちて、あっけなく死んじゃったわ」

希「事故？」

孝子「(首を振って) 分らない・・・」

希「・・・」

孝子「母親に虐待されていたのよ」

希「虐待！」

孝子「ヒステリックに喚き散らし、暴れて、子供に暴力を振るっていた」

希「わ！最低」

孝子「それは酷かったわ。真冬に水を掛けられ、髪の毛を持って、引きずり回され、ドサツと抜けたこともあった」

希「酷い・・・」

孝子「地獄の日々だったわ。幼い兄妹が、たった二人で嵐が通り過ぎるのをひたすら待ったのよ」

希「どうして、逃げなかったのよ」

孝子「(首を振って) そんなこと考えもしなかった・・・」

希「そんな・・・」

孝子「周りが見かねて、母を入院させたの」

希「よかった・・・」

孝子「(首を振りながら) でも母が退院すると、以前よりも暴力が激しくなったわ。酔っぱらうと、もう手が付けられない。何度も死ぬかと思った。その時、体を張って守ってくれたのが、伯父さんだったの。それで、何とか生き延びたのよ」

希「私が生きているのも、伯父さんのお蔭なんだ」

孝子「そう命の恩人」

孝子「でも、不思議ね。あんな酷い母親なのに、死んでしまうと・・・後悔したのよ」

希「え、後悔？」

孝子「(頷いて) もっと自分に出来ることがあったんじゃないか、母親を助けられたんじゃないか・・・死ぬほど苦しい目に会わせられたのに・・・後悔していたのよ・・・」

希「母親ってそんなものなの・・・」

孝子「いつか抱き締めてほしい・・・ずっと母親の温もりを求めていたのよ」

希「何か、哀しいね・・・」

孝子「うん・・・」

希「伯父さんはどうだったの」

孝子「伯父さんは、孤独の人よ。母親が亡くなっても変わらなか

った」

希「孤独の人・・・」

孝子「妹を守るためだけに生きて来た人なのよ」

希「伯父さん、幸せだったのかな・・・」

孝子「(首を横に振る)・・・そうね由佳ちゃんが生まれた時は、
幸せだったと思うよ」

希「本当に溺愛していたもんね」

孝子「由佳ちゃんに障害があると診断されても変わらなかった。
ますますのめり込んでいったわ。由佳ちゃんが少しでも良くなるように、まるで祈るように面倒を見ていたわ」

希「その由佳ちゃんが死んでしまったのね・・・本当に可哀想な
伯父さん・・・」

孝子「兄さん・・・」

二人の心の中には、由佳の死を悼み、光の中で静かに祈り
続ける一夫の哀しい姿があつた・・・
孝子が、じっと希を見つめた。

孝子「希、いてくれてありがとう」

希「何を言い出すのよ」

孝子は、哀しそうな顔のまま、微笑んだ。

孝子「伯父さんの寂しさを考えると、私にはあなたがいる。こ
うして、あなたがいてくれるありがたさを感じるのよ」

希は、泣き笑いの顔のまま、首を振った。

希「ううん、私には、母さんがいる」

孝子「お前がいてくれて、母さんどれだけ助かっているか分から
ない。希、ありがとう」

希「母さん、うれしい。でも今は、伯父さんのために頑張ろうよ
！」

孝子が大きく頷いた。

孝子「そうね、伯父さんに、やっぱり孝子と希がいてくれて良か
ったと思ってもらえる様に頑張ろう！」

希「おおーッ」

希が腕を突き上げ、氣勢を上げた。

孝子「よし、まずは元気をつけよう」

希「母に賛成！」

孝子「任せなさい！」

孝子は、事務所の小さなキッチンへ入っていった。しばらくすると、応接セツトのところに、香ばしいニンニクの匂いが漂ってきた。

希「わあ、おいしそう！母さん何を作っているの？」

希も小さなキッチンに駆け込んできた。

孝子が、フライパンのオリーブオイルにニンニクを入れて炒めている。

希「ラッキー。私の大好物のペペロンチーノだ！」

小さなキッチンで、希が小躍りしている。

孝子「邪魔な子ね。躍るくらいなら、手伝いなさい」

希「はい。手伝います。何なりとお申し付け下さい」

孝子「現金な子ね。まずパスタを茹でるお湯を沸かしなさい。少しお塩を入れるのを忘れないでね」

希「はい。希、湯を沸かして、少しの塩を投入します」

希は、小さなキッチンの中をテキパキと動き始めた。

孝子がフライパンの火を消した。

孝子「希、美味しさの秘訣1は、ニンニクが色づいたら、火を止めて、数分おいておくことなのよ。これでニンニクの香りをしっかりオリーブオイルに染み込ませるのよ」

希「母さん、料理できるんだ。すごい」

孝子「忙しくて中々料理作らないけど、料理の腕は一流よ」

希「本当かな？本当に料理の腕は一流なの？」

孝子は、希の方を向いて舌を出して言った。

孝子「うそよ！作れる料理のレパートリーはあまりないの。ごめんね。でもペペロンチーノは得意料理よ」

希「ペペロンチーノは得意『料理』といえるのかな？でもまあ大好物だから許すわ」

孝子「何を偉そうに言っているのよ。お湯が沸いたから、サツサとパスタを入れなさい。お塩は入れた？」

希「入れたよ」

希がパスタを鍋に投入した。

孝子「茹ですぎないでよ。4分よ」

希「了解です。シェフ」

孝子は、フライパンを再び火に掛け、赤唐辛子を加えて炒めると、香りが立ってきた。

希「ああ、たまらない香りが、私を襲ってきます。助けてシェフ」

孝子「(笑いながら)何言っているのよ、この子は。ふざけないできちんと時間を見なさい。茹ですぎは、ペペロンチーノの大敵よ。アルデンテでなければ美味しくないので」

希「アルデンテは、美味しさの秘訣2でしょうか？」

孝子「ふん、甘いわね。アルデンテは常識よ。美味しさの秘訣2は」

希「美味しさの秘訣2は」

孝子「パスタの茹で汁と、このフライパンの香ばしい油を、うまく混ぜ合わせて白いミルクのようなスープにすることよ」

希「了解です。シェフ」
希は、茹で上がったパスタと、茹で汁をフライパンに入れた。

孝子が、香ばしい油と混ぜるように、かき回し始めた。
小さなキッチンの中で、仲良く母娘が料理を作っている。
できあがったスパゲッティに、黒こしょうを挽きかける。

孝子「本当は、イタリアンパセリを添えたいんだけど、今日は海苔で我慢してね」

皿に取り分け、パラパラと海苔を砕いて振りかけた。

孝子「ちよつと和風のペペロンチーノが出来上がり」

希「お腹ぺこぺこだよ。早く食べよ」

希は、慌ただしくお皿を応接セットに運んだ。
孝子は、秘蔵の白ワインを持ってきた。

孝子「今日は、兄さんのために闘う会の結団式だから、長年の禁酒の誓いを破って、特別のワインを飲むわ」

希「私も」

孝子「あなたはまだ子供だから、ジュースにしなさい」

希「一杯だけ、お願い」

孝子「一杯だけよ」

希「うれしい！」

二人は、ワイングラスにワインを注いだ。

孝子「それじゃ乾杯しましょう！」

希がグラスを持って、立ち上がった。

希「えっへん。不承松本希が乾杯の大役を承ります。伯父さんのために、由佳ちゃん事件の真相究明に全力を尽くすことを誓います。それでは、ご唱和下さい。乾杯！」

孝子「乾杯」

孝子は、久し振りのワインをグイッと飲み干した。

孝子「ああ、やっぱりワインは美味しいわ」

希は、乾杯もそこそこに、さっそくペペロンチーノを頬張っている。

希「おいしい！抜群においしいよ！母さん」

孝子「ペペロンチーノは料理と呼べないかもしれないけど、うれしい！今までは、仕事が忙しくて、まともな料理を作らなかつたけど、これからは、レパートリーを増やすよ」

希「母さん、今の言葉忘れないでね。約束だよ」

孝子「うん、約束する。希のために美味しい料理を作るからね」

希「楽しみだよ。母さん」

希と楽しく談笑しながら、なぜか涙が流れてきた。

○法律事務所（昼）

孝子がデスクで仕事をしている。

『ピンポン』

孝子が机の上のインターホンで答える。

孝子「はい」

里美「里美です」

孝子「お姉さん、どうぞ」

孝子が立ち上がり、入り口に向かう。

里美（40）が入って来る。

孝子が里美にソファを勧める。

孝子「どうぞ」

里美「どうも」

里美がソファに座る。

孝子「お姉さんは、ブラックでしたよね」

里美「コーヒーなんて、どうでもいいのよ。あんたに言っておきたいことがあるから来たのよ。早く座って」

孝子もソファに座る。

孝子「この度は、兄がご迷惑をお掛けして、申し訳ありません」

里美「（不愉快そうに）大変迷惑しております。ストーリーカーの様に付け回されるだけでも不愉快なのに、脅迫状まで送り付けて来るなんて、もう立派な犯罪ですよ」

孝子「本当に申し訳ありません（深く頭を下げる）」

里美「（冷たく）あなたに謝ってもらっても仕方ありませんわ」

孝子「はい、兄と話し合って、里美さんにご迷惑の掛からない様に致します」

里美「父も困っているんですよ。あの人が工場に来なくなつて。わたしも今、大きなプロジェクトを立ち上げているのです。

あなたのお兄さんのために、私の大事な仕事に支障をきたしたら、どう責任を取って頂けるのですか（怒り）」

孝子「ごめんなさい」

里美「妹のあなたに言うのも何ですが、あの人おかしいんじゃないやありませんか。娘を亡くした悲しみは、私も同じです。私の不注意が事故を招いたことは深く、深く反省していますが、私が、娘を殺したと騒ぎ立てるのは、酷すぎます。悲しくて、辛くて夜も眠れないんですよ（涙を拭う?）」

孝子「兄は、殺人だと信じています」

里美「どこに証拠があるのよ！あるのなら、さっさとここに出しなさいよ！本当に迷惑だわ」

孝子「ところで、真相はどうなのですか」

里美「（気色ばんで）あんた、何を言うの！警察が事故と断定した

のよ！」

孝子「すみません」

里美「障害があつたとしても由佳は私の娘です。可愛くない訳がないじゃないですか」

孝子「(領きながら)でも世間では、子供を虐待して死なせる母親もいるのですよ」

里美「母親が娘を殺すなんて、私は信じられません！」

孝子「お姉さん、お願いします。弁護士の私が全責任を持ちますから、被害届を取り下げて頂けませんか(頭を下げる)」

里美「取り下げるつもりはありません」

孝子「裁判になれば、半年はかかるんですよ」

里美「半年！」

孝子「それに、裁判で由佳ちゃんの事故のことが蒸し返されるのは、かえって迷惑なんじゃありませんか」

里美が少し考えている。

里美「(態度が一変して)分つた。取り下げましょう。父の工場にも迷惑をかけられません。不本意ですが、取り下げます」

孝子「ありがとうございます(頭を下げる)」

里美「ただし、一つ条件があります」

孝子「・・・」

里美「弁護士であるあなたの責任で、お兄さんが、今後一切私に係わらないことを約束してくれるなら、取り下げます」

孝子「(少し考えて)分かりました。お約束致します」

里美が腕時計を気にする。

里美「それでは、大事な会議がありますので、失礼します」

里美が立ち上がるようにする。

孝子「お姉さん、あなたにとって結婚って何だったんですか」

里美「え、結婚？(少し考えて)人生最初の躓きかな」

孝子「躓き？」

里美「いい人だと思ったから、結婚したのよ。でも生活してみても分つたのよ。冗談も通じないのよ」

孝子「不器用なんですよね」

里美「不器用？ふん、ものは言いようね。あの人は、結婚に向かない人よ。そして、出産が第二の躓き。まさか自分の娘に、

障害があるなんて考えもしなかったわ」

孝子「大変だったでしょう」

里美「病院で診断を聞いた時は、信じられなかった。信じたくなかった。将来のことを考えたら、正直目の前が真っ暗になっ
たわ」

孝子「・・・」

里美「母親としての気持ち、分かってもらえますか？」

孝子「ええ・・・」

里美「子供がお腹にいる時は、将来は医者にしようと期待して
たの」

孝子「・・・」

里美「そしたら皮肉ね。医者が必要な子が生まれたのよ」

孝子「・・・」

里美「娘の障害は重荷なのに、あの人は違っていた。益々娘にの
めり込んでいったのよ」

孝子「家族が欲しかったんですよ」

里美「毎日の送り迎えはもちろん、休日も由佳のことばかり。私
たちの生活もないのよ。お互いのために、施設に入院させよ
うとしたけど、反対されたわ。私には理解できなかったわ」

孝子「兄は、それだけ由佳ちゃんを愛していたのです」

里美が鋭い目で、孝子を睨み付けた。

一瞬、二人の間に、冷たい緊張が走った。

里美「私だって、由佳を愛していたわ」

孝子は、里美の目をじっと見つめた。

里美は、腹の底から湧き上がってくるような低い声で、静
かに言った。

里美「母親が娘を失う辛さは、経験したものしか分からない」

涙は流れていない。しかし能面のような無表情の顔の真ん
中にある里美の瞳の奥には、深く暗い哀しみの色が宿って
いた。目の前にいる里美は、母として、間違いなく深い哀
しみの中にいる。母としての里美の哀しさは、本物だと思
った。

孝子「ご愁傷さまです。心からお悔やみ申し上げます」

孝子は、頭を深く下げて言った。
里美は、能面のような無表情のまま、しばらく孝子を見つめていた。

里美は、孝子の言葉を無視して、再び時計を気にする。

里美「今度のプロジェクトが成功すれば役員になれるの。女が今の社会で生き残っていくのは大変なのよ。孝子さんだったら、分かって下さるわよね。だからこれ以上私に係わらないで下さい。お願いします。(頭を下げて、ついでに時計を見て)今から大事な会議なのです。失礼します」

里美が慌ただしく、事務所を出ていく。

ソファに取り残された孝子が、深くため息を吐く。

ぼつりという孝子。

玄関の反対側から希が現れる。

希「お母さん、あんな奴のことを信じるの」

孝子「里美さんの言うことも、分かる気がする」

希「何言っているのよ！伯父さんが信じられないの」

孝子「(首を振って)分からない・・・」

希「もつと伯父さんを助けてあげて」

孝子「母さんだって、やれることは、やっているわよ」

希「伯父さんの証拠集めも手伝ってあげてよ」

孝子「証拠集め？警察が事故と断定したのに、どんな証拠がある

と言うのよ」

希「伯父さんは言っていた。里美しか由佳を殺せないって」

孝子「本当に、事故だったかもしれないじゃない」

希「(首を振って否定する)伯父さんは、真実の証を求めている」

孝子「真実がどうあれ、証拠がなければ裁判じゃ無罪なのよ」

希「伯父さんは言っていた。真実こそ光だ！唯一の救いだ」と

孝子「希、教えてちょうだい。伯父さんは、一体何を捜している

の！何をするつもりなの！」

希「伯父さんは言っていた。たとえ裁判で裁けなくても、天が必ず裁いてくれる。だから、私たちは、天の裁きのために証拠を

集めているのよ」

孝子「天の裁き？何言っているのよ！」

希「(首を振って)伯父さんは諦めない。きっと、真実を明らかに

するわ。だから母さんも伯父さんを手伝って。お願い！」

孝子「母さんは、お前が、これ以上伯父さんに巻き込まれて欲しくないのよ」

希「伯父さんは、お母さんの命の恩人じゃないの！」

孝子「母さんは、希、お前のことが……」

希「私のことなんか心配しないで！」

孝子「希……」

希「今こそ、伯父さんに恩を返す時じゃないの！」

孝子「……！」

希「お母さんがやらなきゃ私がやるしかないのよ」

希が走り去る。

疲れ切った孝子がゆっくり首を振りながら、大きなため息を吐く。

静かに暗転。

○法律事務所

外は冷たい雨が降っている。

一夫が、傘もささず雨に濡れながら、事務所に飛び込んできた。

孝子は、雨に濡れた一夫の変わりように驚いた。一週間前より更にやつれている。娘を喪った哀しみがこれほど人を変えてしまうのか。そう思うと兄の哀しみの深さに胸が痛くなった。

孝子「兄さん、これで体を拭いてちょうだい」

タオルを受け取った一夫は、体を拭いて何も言わずにソファに腰を下ろした。

一夫「頼んだ資料を受け取りに来た」

孝子は、用意していた資料を渡した。

一夫は、受け取った資料をじっと見つめていた。

孝子「兄さん、体大丈夫？」

一夫は、資料をテーブルに置き、自分の手を見ながら、ポツンと言った。

一夫「眠れないんだ・・・」

孝子「兄さん・・・」

一夫「眠れないのに、夜になるのが怖い・・・由佳のあどけない表情、ぎこちない仕草を思い出すと、胸が締め付けられて、はきそうになる。でも忘れたくないんだ。由佳のすべてを、由佳との四年間を：由佳との楽しい思い出は、恐ろしい悪夢よりも俺を苦しめる」

孝子「兄さん、苦しいのは分かる。でも・・・」

一夫「苦しくて、切なくて、もう居ても立つても居られない：」

兄の足が小刻みに震えている。

兄の顔が、やつれ果てた兄の顔が、苦しみに歪んでいる。

一夫「決して忘れたくない。由佳を感じたいんだ。ずっと由佳の思い出の中で生き続けたい・・・でもそれが地獄なんだ・・・ふと由佳はもういないと気づくと、地獄の苦しみが襲ってくる。一晩中それを繰り返し返している・・・孝子・・・俺はどうしたらいいんだろ・・・」

孝子「兄さん・・・」

孝子は、もがき苦しむ兄に、掛ける言葉が見つからない。

苦悩に歪んだ兄の顔から、絞り出すように涙が溢れ、嗚咽で言葉が聞き取れない。

一夫が諦めたように深くため息をつき、目を閉じて静かに言った。

一夫「いつそ由佳のところへ行くか・・・」

孝子「ダメ！兄さんが死んでどうするのよ！由佳ちゃんは、決してそんなこと喜ばないわよ！」

一夫が遠い目をして言った。

一夫「由佳が喜ばないのは、分かっている・・・孝子、夜中に由

佳が話しかけてくるんだ」

孝子「え・・・」

一夫「一瞬まどろんだ時、話せないはずの由佳が、俺に話しかけてくる」

孝子「兄さん・・・」

一夫「『お父さん、助けて』って」

一夫の瞳の中に、光が戻って来た。その光には、復讐の赤い決意の色が見えた。

一夫「孝子、俺には分かるんだ。由佳を愛していた俺には分かる。俺は里美がやったと確信している」

孝子「兄さん、兄さんがどんなに確信していても、証拠がなければ有罪にはできないのよ」

一夫「俺は、里美の犯行を暴くために生きている。分かってくれ、孝子。お前だけは、俺を信じてくれ。いつもの様に、俺を助けてくれ。頼む」

兄の悲痛な叫びが胸に刺さった。

孝子は、兄の気持ちを少しでも和らげようと思って言った。

孝子「里美さんが、説得に応じて『被害届』を取り下げてくれたのよ」

少しは喜んでくれると思ったのに、一夫は吐き捨てるように言った。

一夫「裁判になった方が良かったんだ」

孝子「何言っているのよ」

一夫「裁判がきっかけで、再捜査されるなら、俺は刑務所に入っても良かった」

孝子「兄さんが、由佳ちゃんを愛していたのはよく分かっている。

でも由佳ちゃんは、死んでしまったのよ」

一夫は、目を瞑って、また深くため息を付いた。

一夫「俺は、由佳を守ってやれなかった。俺は、父親として、その償いをしなければならぬ」

孝子「どんな償いな」

一夫「俺は、どうなっても良いんだ。里美は裁かれなければならぬ。そのためには、俺は何でもやる」

孝子「兄さんがどんな頑張っても由佳ちゃんは、もう戻ってこない、戻ってこないのよ！」

哀しい現実の刃を胸に突き立てられた一夫の顔が、苦悩に歪んだ。

一夫「孝子、由佳との四年間は、俺の人生のすべてなんだ。分か

つてくれ」

孝子「兄さんが殺人だと確信していても、裁判では」
孝子の言葉を遮り、一夫は毅然と言い切った。

一夫「罪を裁くのは、法律だけじゃない」

孝子は、一夫の瞳の中に強い光を見た。それは、愛する者を奪われた男の復讐の光だった。
兄の復讐の光は、希の瞳の中に見た狂信的な光と同じだった。

孝子「天の裁きがあるというの」

一夫「そうだ。里美は、裁かれるべきなんだ」

孝子「母親もその天の裁きとやらが裁いてくれたとでも言うの」

一夫は、孝子の目をしっかりと見つめ、断言した。

一夫「そうだ。母親は、裁かれたのだ！」

孝子「兄さん、何を訳の分からないことを言っているのよ。これ以上周りを振り回さないで！お願いします」

哀しそうな目をして、孝子の厳しい言葉を聞いていた。そして、静かに目を閉じ、一夫は暗い闇の中に沈み込んでいった。

孝子は、哀しみに沈んだ一夫を見つめた。そして、愛する由佳ちゃんを喪った兄に、混乱している兄に、何て酷いことを言ったのか深く後悔した。

重苦しい沈黙が二人を包んだ。

『ピンポーン』

孝子が机の上のインターホンに出る。

孝子「はい」

インターホン「塩沢です。東都大学の塩沢です」

孝子「え！塩沢先生ですか。どうぞお入りください」

孝子が慌てて玄関に行く。

塩沢が悠然と入って来る。

塩沢「お邪魔するよ。(部屋を見回して)中々いい事務所じゃないか。おめでとう」

孝子「(緊張気味に)先生どうぞ」

孝子が塩沢にソファを勧める。

塩沢「これはつまらないものですが、どうぞ」

孝子「お気遣いありがとうございます」

孝子が品物を受け取る。

孝子「わあ、千疋屋のゼリー！大好物なんです」

塩沢「それはよかった。冷やしてお召し上がりください」

孝子「ありがとうございます」

塩沢が、一夫に気付き会釈する。

孝子「兄です」

一夫が立ち上がって会釈し、塩沢にソファを勧める。

一夫「どうぞ」

塩沢「どうも」

塩沢がソファに座る。

孝子「(一夫に)東都大学の塩沢教授。大学の恩師なの」

一夫「孝子がお世話になっております(頭を下げる)」

塩沢がにこやかに頷いている。

孝子「(一夫に)兄さん、お茶お願いします」

一夫「分かった」

塩沢「どうぞお構いなく」

一夫「ごゆっくりして行ってください」

一夫が、孝子から紙袋を受け取り、奥へ行く。

孝子「先生、ご無沙汰しております。(頭を下げる)先生のご指導のお蔭で、弁護士になれました」

塩沢「立派な事務所だ。君の努力の賜物だよ。君ほど優秀な学生はなかなかいないよ。ゼミで教えている時から注目していたんだ」

孝子「ありがとうございます！そう言って頂いて感激です」

塩沢 「君の同期は特に優秀だったの、印象に残っているよ。岡崎くんは、同期だったよね」

孝子 「はい、同期です」

塩沢 「いま東京地検特捜部の副部長だよ」

孝子 「あの岡崎君が副部長ですか」

塩沢 「そうだよ。軽井沢のゼミ合宿で、君に泣かされたあの岡崎だよ」

孝子 「先生、人聞きの悪い事言わないで下さいよ。ディベートで勝っただけですよ」

塩沢 「あそこまで徹底的にやって、泣かさなくてもいいだろう」

孝子 「男のくせに泣く方が悪いんです」

一夫 「一夫がお茶を持って来る。」

塩沢 「女にしておくのはもったいないと思っていたよ」

孝子 「先生、その発言は女性差別です。断固抗議いたします」

塩沢 「(一夫に) ね、怖い、怖い」

一夫 「(苦笑いしながら) 女には勝てません」

孝子 「(口を膨らませて) 冗談ですよ」

塩沢 「(一夫に) お兄さんもお座りください」

一夫 「失礼します」

一夫 「一夫が席に着く。」

孝子 「軽井沢のゼミ合宿楽しかったな。先生、覚えています。宴会の時、私とお酒で勝負したの」

塩沢 「いや、あれはまるで悪夢だったよ。水みたいに酒を飲む松本君を見ながら、今後一生女性との勝負はしないと誓ったんだ。そのあと気を失った」

孝子 「楽しい合宿だったわ」

塩沢 「私には苦い思い出だよ」

一夫 「先生災難でしたね」

塩沢 「まさに女難だったよ」

孝子 「女難なんて失礼ですよ」

塩沢 「(笑いながら) ところで、松本君」

孝子 「はい」

塩沢 「唐突なんだが、大学に戻ってこないか。すぐとは言わないが、一介の弁護士で終わらせるには、惜しい人材だと思って

いる」

孝子「ほ、本当ですか！」

塩沢「それなりのポストは用意する」

孝子「先生、ありがとうございます」

一夫「孝子、よかったな」

孝子「兄さん、嬉しい」

塩沢「喜んでもらって、私も嬉しいよ。ところで（一拍あって）、

今日はもう一つお願いがあつて来たんだよ」

孝子「お願い？先生が私に、ですか？」

塩沢「（時計を見て）実は、依頼人を外で待っているんだ。呼んで

いいかな」

孝子「（嬉しそうに）依頼人ですか？どうぞ」

塩沢が玄関まで行き、外で待っていた里美を招き入れる。

里美が入ってくる。

一夫と孝子が立ち上がる。

一夫「里美！」

孝子「お姉さん！」

塩沢「依頼人の里美さんです。彼女のお父さんとは、昔から昵懇

の中なのですよ」

孝子は怪訝そうな表情。一夫は警戒を強めている。

孝子「え、お姉さんが依頼人」

里美「どうも」

孝子「どうぞ」

里美と塩沢がソファに座る。

孝子も座る。

一夫「お茶を入れてくるよ」

塩沢「いや、お兄さんもこちらに座って下さい」

一夫が、渋々孝子の横に座る。

塩沢「お二人に、改めてお願いがあるのです。今回の娘さんの不幸な事故には心からお悔やみ申し上げます。お兄さんの動揺する気持ちは分る。でも、里美さんも被害者なんです。最愛の娘を亡くし、悲しみのどん底にいる彼女を、これ以上苦しめないで欲しい」

孝子「先生、事情はよく分かっております。先日里美さんとお約束したことは、兄にも伝えております」
一夫もそれを肯定する。

里美「孝子さん、私は弁護士であるあなたを信頼して、今後一切私に係わらないという条件で、被害届を取り下げたのですよ。その信頼をあなたは、裏切ったんです！」

孝子「裏切っていません。何があったというのですか」

塩沢「残念ながら、脅迫は続いているのです」

孝子が一夫を見る。一夫は否定する。

塩沢が鞆の中から、大量のFAXを取り出す。

塩沢「『殺したのはお前だ！』こんなFAXが、里美さんの会社に大量に送られてきているのです」

里美「あなたは、約束してくれたじゃありませんか。今後一切私に係わらないと。このFAXで、どれほど迷惑しているか分からないのですか！」

孝子「兄さん？（一夫を見る）」

一夫「俺じゃない」

塩沢「だったら、誰がこんな脅迫をするのですか？このFAXは、この事務所から送信されているのですよ」

孝子「え！この事務所から？」

塩沢「確たる証拠もなしに、殺人者呼ばわりするのは犯罪ですよ。このような脅迫状を職場に送り付けてくるのは、明らかに威力業務妨害です。法的処置を取らせて頂きますよ」

孝子「先生、待って下さい！今回の件、私に調べさせて下さい。

お願いします」

孝子が頭を下げる。

塩沢「調べてどうなさるのかな」

孝子「今後、このようなことが無いように最善を尽くします。ですから今回は、私に任せて頂けませんか」

里美「（ヒステリックに）あんた、何を偉そうに言っているのよ！前回の約束も守れなかったのよ！あたしがどれだけ迷惑しているか、まだ分からないの！」

孝子「本当に申し訳ありません。今回のFAXの件は、私が責任を持って調査致します」

里美「あんたね（立ち上がる）」

塩沢が里美を制する。

塩沢「分かりました。お兄さんを訴えるために来たものではありません。もうこれ以上、里美さんに係わらないことを、お兄さんが約束して頂ければ、今回は引き揚げます」

孝子「ありがとうございます。（頭を下げる）お姉さんにはこれ以上ご迷惑をお掛けしない様にします。（一夫を見て）ねえ、兄さん」

一夫「俺は知っている。真実が、お前を裁くことを」

里美「何を血迷ったことを言っているのよ！」

塩沢「お兄さんは、面白いことをおっしゃいますなあ」

一夫「天の裁きが、お前を許さない」

孝子「兄さん！」

塩沢「お兄さんはユニークだ」

里美「（冷ややかに）私には、あなたの妄想のお相手をしている暇はないのよ」

一夫「（立ち上がって）俺は、お前を告発し続けるぞ」

孝子「兄さん！先生の前で止めて！お願い」

孝子が一夫を奥に連れて行く。

孝子が戻ってくる。

孝子「大変失礼しました」

塩沢「精神の病気の大きな特徴は、本人に自覚がないことだ。それが怖い！」

孝子「・・・」

塩沢「君の同意があれば、強制的に措置入院させられますよ。これ以上警察沙汰になるよりも、その方が君の為なんじゃないですか。松本君、君には将来がある」

孝子「・・・」

塩沢「あなたたち兄妹の過去を調べさせてもらいました」

孝子「・・・」

塩沢「私は、母親に虐待されたあなたたち兄妹に、同情を禁じ得ない。しかし、私は依頼人の人権を守る立場にある」

塩沢が一拍置いて、孝子をじつと見つめる。

塩沢「分るだろ、松本君」

孝子「先生……」

塩沢「実は、25年前のお母様の死に、警察は重大な関心を持っていた」

孝子「母の死……」

塩沢「突き落とされた可能性が最後まで残っていたが、証拠がなかった」

孝子「あれは、事故だったのです……」

塩沢「松本君、法廷で泥沼の暴露合戦をやってもお互いに得るものはない。君とそんなことはしたくない。まして、亡くなった娘さんが戻る訳じゃない」

孝子「……分かりました。私の責任で、これ以上里美さんに一切係わらないことをお約束致します」

塩沢が立ち上がって、孝子と握手する。

塩沢「ありがとう、松本君。今日来た甲斐があった。里美さん。

私もこれでお父様に顔が立つ」

里美「先生、本当に大丈夫でしょうか」

塩沢「任せなさい。お父様には、私の方から伝えておきます。(孝子に) 松本君、大学の件は後日連絡するよ」

孝子「……分かりました」

塩沢「それじゃ、失礼します」

塩沢と里美が帰りかける。

孝子も立ち上がる。

一夫が奥から出てくる。

一夫「天の裁きが、お前を許さない！」

孝子「兄さん！もう止めて！」

塩沢「早く入院させた方がいい」

塩沢と里美が去る。

孝子が戻って来て、ソファに座る。

沈黙。

一夫「俺は、狂っているのか……」

孝子「兄さん……(苦しげに表情がゆがむ)」

一夫「今でもあの忌まわしい過去の記憶が、フラッシュバックのように現れて、俺を苦しめる」

孝子「むごい経験だったわ」

一夫「由佳を叱っている里美の顔が、あの母の形相と重なって、もう息苦しくて耐えられなくなってくる。俺は、結婚すべきじゃなかったんだ」

孝子「でも人生からは逃げられないのよ」

一夫「俺には、あの母の血が流れているんだぞ」

孝子「遺伝がすべてじゃない」

一夫「小さい時から、記憶が飛ぶことがあった・・・自分で、不安なんだ」

孝子「誰でも調子の悪い時はあるわよ。だからゆっくり休んで。お願い」

一夫「赤ん坊の由佳を抱きながら、このまま手を放したら、と考えて、恐ろしくなったことがある・・・自分が怖いんだ。何をするか分からない自分が怖いんだ・・・」

孝子「兄さん止めて。私まで不安になる・・・」

苦悩する一夫。

それを見つめる孝子。

孝子「兄さん、由佳ちゃんの病気も私たちの血のせいなの」

一夫「(孝子を見つめて) 違う」

孝子「？」

一夫「里美が由佳を施設に入れようとした時、俺は反対した。助け合うのが家族だ。どんなに苦しくても夫婦二人で、由佳を育てようと言ったんだ」

孝子「・・・」

一夫「その時、里美は、はっきり言った。由佳は、あなたの子じゃない」

孝子「え！そんな・・・！！」

一夫「たとえ血がつながっていなくても、由佳は俺の家族だ。由佳を抱いた温かさの中に、俺は、生き甲斐を感じていた。由佳の成長の中に、失った青春を見つけたかったんだ」

孝子「兄さん・・・」

一夫「でも俺が、由佳を可愛がれば可愛がるほど、由佳は里美になつかなかなくなった。そんな由佳を里美は、疎ましく思っていたのかもしれない。俺の由佳に対する愛情が、里美を追い詰めたんだ。俺が・・・由佳を・・・」

孝子「そんな自分を責めないで」

一夫「俺は、家族が欲しかった。たとえ血が繋がってなくても、

由佳は俺の家族だ。俺の宝物だったんだ」

一夫がふらふらと立ち上がる。

一夫「今の俺には、もう由佳のことしかないんだ」

孝子「兄さん・・・」

玄関に向かう一夫の腕を、孝子が掴もうとして、弾き飛ばされる。その刹那一瞬玄関に希が見えた。

一夫が事務所を出ていく。

一人残された孝子。

孝子「疲れたわ・・・」

希が帰って来る。

希「聞いていたわ。母さんは出世のために、伯父さんを売り渡すの！」

孝子「何てこと言うの！母さんは伯父さんを守りたいだけよ」

希「フン！何が守りたいよ。調子のいいこと言っ。軽蔑するわ」

孝子「伯父さんの行動に不安を感じているのは、母さんだけじゃないのよ」

希「何が不安よ！伯父さんは誰よりもまともよ。その伯父さんを、

お母さんは病院に送ろうとしている」

孝子「伯父さんは、精神的に参っているのよ」

希「真実を捜すことが、狂っているというの」

孝子「何が真実よ。まともな証拠がなければ、絵に描いた餅と同じじゃない」

希「私は、どんなことでもして、里美さんを追い詰めてやる」

孝子が、希の表情を見る。

孝子「あ、あんななの！この事務所から脅迫のFAXを送り付けたのは！」

希「そうよ！あたしよ。あたしはずっと伯父さんの味方！裏切り者のあんたとは違うわよ」

希の魔女の高笑い。

孝子の目がつり上がり、頭の中で真っ赤な火花がスパークした。

孝子「ふざけんじゃねーよ！」

『バシッ！』

孝子が、希を殴る。

孝子「何も分からないガキのくせに！」

殴られた希が、挑発的に孝子を睨みつける。

孝子「何だ、その目は！」

希「いつも気にくわないことがあると、直ぐに手を上げる。あんななんか最低の親だ！」

孝子「なに！」

孝子が完全に自分を失って、思い切り希を殴る。

『バシッ！』

希は、ヒッ！と短い悲鳴を上げ、飛び退いた。

その希を捕まえて、力任せにテーブルに投げつける。

希の頭がテーブルのカドにぶつかり、血が吹き出た。

自分を失った孝子が、希をテーブルに押し付けて、尚も殴り続けている。

『バシッ！』『バシッ！』『バシッ！』

事務所には、希を殴り付ける音と、希の『痛い！』『助けて！』の悲鳴だけが響いていた。

孝子「このバカ娘！バカ！死ね！バカ！」

希は小さく蹲って殴られている。

希「止めて！もう止めて！お願い止めて！」

孝子は、今度は馬乗りになって希を激しく殴り続けている。

孝子「死ね！死ね！おまえなんか死んでしまえ！」

希「助けて！助けて・・・母さん！」

希の『母さん！』という声に、孝子が弾かれたように我に返る。

攻撃が止まった瞬間、希も弾かれたように孝子から離れた。

希「許してください。私が悪かった。どうか許してください。・」

孝子の前で、謝り続ける希。

我に返った孝子には、希がなぜ謝っているか分からない。

孝子「……あなた、何言っているの？何謝っているの？」

泣いている希にゆっくり近づいていき、そっと希の傷に触れようとしたが、希はその手を激しく払いのけた。

希は泣きながら、自分の体を抱え、ゆっくりと孝子を見る。

希「……母さんこそ、病気だ……」

孝子「病気？」

希「辛い事全部あたしに押し付けて……」

孝子「そ、そんなことない」

希「いつも私に辛く当たる……」

孝子「母さんは、お前のことが心配なの！伯父さんに巻き込まれているお前が心配なのよ。娘のお前が……」

希「あたしの心配より、自分の心配をしなさいよ。私を、叩いたあなたの手には、『残酷な血』が流れているのよ」

孝子が、ハッと我が手を見る。その手は、希の血で赤く染まっていた。

孝子「ぎ、残酷な血……」

希「そうよ、そして……」

希が孝子を睨みながら、ゆっくり立ち上がる。

希「……あたしにも流れているんだ。その残酷な血が！」

言い捨てて、希が走り去る。

孝子「希！」

希を追いかけようとしたが、足が動かない。

孝子「希！いかないで……」

全身の力が抜けて、孝子が座り込む。

孝子「ごめん、ごめんなさい・・・希・・・」

孝子が、じつと血に染まった自分の手を見る。先ほど希を叩き続けた残酷な情景が、フラッシュバックのように、甦ってきた。

『虐待は、連鎖する』という悪魔の言葉を、何度も何度も打ち消したが、頭の中から消えない。母の虐待に苦しみ、地獄を見ながら、やっと生き延びた。そして、きつとその先には、安住の地があると信じていたのに、ああ、悲劇は終らないのか・・・

孝子「私は、あれほど憎んだ母親と同じことをしている・・・」
静かに暗転。

○取調室

深刻な表情の孝子と土井刑事が向かい合って座っている。

孝子「兄が心配なのです」

土井「まだ、奥さんに対する脅迫が続いているのですか」

孝子「いえ、でも行動がおかしいのです」

土井「行動がおかしい？」

孝子「兄は、娘の死は、殺人だと固く信じています。真実の証拠を集めると言って、昼夜関係なく調べ歩いているのです」

土井「真実の証拠ですか？」

孝子「まるで、神様が裁く材料を集めると言うように」

土井「神様が裁く材料ね・・・そういえば先日取り調べでも、

そんなこと言っていたな。宇宙の意志だの、天の裁きだの荒唐無稽なことを言っていました。最初は、ちよつとおかしな奴だと思っていました。あれだけ真剣に言われると、何だか自分の方が間違っているような気になったんですよ」

孝子「そうなんです。兄は、周りを巻き込むのが上手いんです」

土井「まあ、神様が裁いてくれれば、警察も楽なものですけど。現

実問題、物証がなければ警察は動けないです」

孝子「物証というより、何か精神的なものを捜しているようですよ」

土井「何を調べているんですか」

孝子「過去の母親による子殺し事件を調べています」

土井「子殺し事件？」

孝子「犯行の場所、時間、方法、動機を、裁判の記録だけでなく、事件の関係者を直接取材して調べています。まるで、その中に、由佳ちゃんの事件の証拠が隠されているかのように、徹底して調べているのです」

土井「それが心配なのですか？」

孝子「弁護士のアたしに、膨大な資料を集めるように要求しているのです。由佳ちゃんの病気に関しても、徹底的に調べています。何人ものお医者様に、直接取材もしています」

土井「（イラついて）だから、それがどうしたと言うんですか」

孝子「尋常じゃないんです。兄がこのペースで調べ続けると、私の人生まで奪っていく気がするのです」

土井「先生、それはあなたが、お兄さんと話し合うしか方法がないのじゃありませんか」

土井が腕時計を見て時間を気にする。

孝子「はい、それはそうなんですが・・・一番気掛かりは、娘の希なのです」

土井「娘さん？」

孝子「娘は、兄を尊敬しています。兄の言うことには、何でも従っているようです。娘は無防備です。このまま兄に巻き込まれていくと、どんどん泥沼にはまり込んで行く気がします」

土井「まあ、お母さんとしたら、ご心配でしょうが」

孝子「心配なのです。私の言うことなど聞きもしないで、どんどん私から離れていく娘が心配なのです。私は、娘の前では無力です」

土井「・・・」

孝子「娘を守りたいのです。助けて下さい」

土井「助けてと言われても、警察に何ができますか？」

孝子「たった一人の娘を失いたくない」

土井「あなたは、お兄さんが何をすることを恐れているのですか」

孝子「兄は、何をするか分かりません。それが怖いのです」

土井「警察は、何か起こるまで動けないんです。お兄さんを拘束しておくことは出来ないのですよ」

孝子「悪い予感がするのです」

土井「悪い予感？」

孝子「兄が、由佳ちゃんの敵を取ろうとしている兄が、何か恐ろしい事をするのではないかと・・・」

土井「恐ろしい事？それは、人に危害を加えるということですか」

孝子「(首を横に振っている)・・・」

土井の携帯が鳴る。

その音に怯える孝子。

土井「失礼」

土井が後ろを向いて携帯にでる。
不安な孝子。

土井「何！すぐ行く」

孝子「・・・！」

土井「ご心配なさったことが起こりました」

孝子「え！」

土井「お兄さんが自殺を図ったそうです」

孝子「兄が！自殺！」

閃光が走る。

激しい衝撃音とともに暗転。

○法律事務所（夕方）

孝子が頭を抱えてソファに座っている。

希が登場し、孝子の肩にそっと手を置く。

ビクツとする孝子。

孝子「希・・・」

希「伯父さんは大丈夫？」

孝子「まだ分らない」

希「・・・」

孝子「睡眠薬を飲んで自殺を図ったの。全部母さんのせい。伯父さんを追い詰めたのは母さんのよ・・・」

希「母さん・・・」

孝子「希、母さんは、自分の人生が伯父さんに奪われていく気がしたのよ」

希「自分の人生？」

孝子「そう、伯父さんの正義が、母さんの人生を奪っていくのよ。本気で伯父さんを入院させようと思ったの」

希「伯父さんは、狂ってなんかいない！誰よりもまともよ」

孝子「（頷いて）母さんがおかしかったのよ。たった一人の兄さんを信じられない母さんがおかしかったの。人生を投げ出しても、兄さんを信じるべきだった」

希「母さん、伯父さんは、ずっと母さんを信じている。今でも信じているのよ」

孝子「希」

孝子がじっと希を見つめる。

希「私には分る。伯父さんの自殺は、命がけの叫びなんだ！母さんに助けて欲しいというメッセージなんだよ」

希の熱い言葉に、孝子の心が動く。

希「今からでも遅くないよ！伯父さん助けようよ。真実の証拠を捜そうよ」

孝子が、デスクから一夫の調査資料を持って来て希に見せる。

孝子「これが、伯父さんの部屋に有った調査資料よ。まず手分けして、これを調べましょう」

孝子が資料の半分を希に渡す。

希「嬉しい！（資料を抱えて）」

希が涙を拭う。

孝子「希、どうしたの」

希「母さんと一緒にやれるのが嬉しくて・・・」

孝子「（フツと微笑んで）これからが勝負よ！」

希「はい！母さん。希、頑張ります」

孝子「由佳ちゃんの事件に関して、見落としがないか確認して。何か気に掛かった箇所があったら教えてちょうだい」

希「はい、母さん」

二人がソファに向かい合って座り、資料を調べ始める。

希「母さん、法律家としての視点も忘れないでね」

孝子「ハイ、ハイ忘れませんよ」

孝子は、一番上の資料に目を通した。

裁判の詳しい公判記録があり、一夫自身が取材した詳細な関係者・当事者のインタビュー記録、それと実際の犯行現場の見取り図、当時の付近の状況、またそれらの資料を詳細に分析した上での時系列の犯行の実行状況が生々しく記されている。まさに犯行当時の映像が浮かび上がり、母の哀しさと、残酷さが透けて見える様な気がした。

孝子「これだけ詳細に調べてあると犯罪のドキュメンタリーが作れるわね」

希「やっぱり、伯父さんは凄い」

兄が、優秀な兄が命を懸けて作った資料だった。

兄が信じたように、きっとこの中に、由佳ちゃんの事件を解決するヒントが潜んでいる、そう確信した。

外の雨は止み、事務所には日差しが入ってきた。

二人は、てきぱきと資料を調べ続けている。

希は、手元の資料から、一夫の育児日記を見つけ、真剣に内容を確認している。それから急いで、母のデスクに行き、残りの資料が入っている段ボールの中を調べ始めた。そして残りの育児日記を何冊か見つけ、段ボールから取り出し、ソファに戻り、熱心に読み始めた。孝子も希の動きに気がついて尋ねた。

孝子「どうしたの？」

希は、その資料をしっかりと手に取り、見つめながら言った。

希「これは、伯父さんの育児日記なんだけど、毎日ぎっしり書いてある。4年間毎日だよ。生まれてから毎日だよ。成長の記録なんだ」

孝子「由佳ちゃんの生きた証ね」

希「母さん、これ見て」

孝子「何よ」

希が、孝子の所に行き、一緒に日記を見る。

希「赤い字で書いてあるのは、由佳ちゃんの記念日なんだ」
孝子「記念日？」

希「初めて目を開けた日、初めて笑った日、ハイハイできた日。
記念日として赤い字で書いてあるのよ」

孝子が、希から日記を受け取り、内容を確認する。

孝子「ホントだ。初めて寝返りをうった日、一年半でやっとハイハイして、成長は遅いけど、伯父さんの喜びが伝わってくるわ」

二人で日記を見ていると、突然、希が大発見したように、日記のページを母に指し示した。

希「母さん、ここ見てよ！三歳で、やっと歩いた記念日。伯父さんが、良くできましたと花マルを付けているの。あたし、こんな素敵な花マル見たことないよ・・・」

孝子「伯父さんは、由佳ちゃんをこんなにも愛していたのよ」

希がじつとその素敵な花マルを見つめている。
育児日記・・・孝子には気がかりなことがあり、希からそつと目をそらした。

その時、希がぽつりと言った。

希「お母さん、私の育児日記はあるの？赤ちゃんの時の写真は？」

その言葉は、まさに孝子が恐れていた言葉であった。

孝子「ごめんね。母さん、仕事が忙しくて、残していないの」

母の言葉を聞き、希は落胆した。

希「私、愛されていなかったんだ・・・」

希の目から、大粒の涙がぼろぼろ流れた。

孝子「そ、そんなことないわ！母さんは、お前を愛しているし、お前が一番大切なんだよ」

その時、突然希の泣き顔が『変顔』に変化した。

孝子が驚いていると、その『変顔』が笑顔になった。

希「エへッ母さん、引つ掛かった。ウソ泣きだよーん」
うそ泣きと分つて、ホツとしたが、希に対する後ろめたさは消えなかった。

孝子「何よ、この子。泣きまねまでして」
孝子が、希の頭をコツンと叩く。

希「エへッ：やつぱり、母さんは、冗談が分からないんだ」

孝子「そんなことないわ。学生の方は、笑いの達人って呼ばれていたのよ」

希「ウフツ、それは笑える」

孝子「ホントなんだから」

希は少し寂しそうに言った。

希「母さん・・・やつぱり私、由佳ちゃんが羨ましい・・・」

孝子「でも、由佳ちゃんは、もう成長できないんだ」

希「由佳ちゃんも、伯父さんも・・・可哀想・・・」

孝子「希、もうウソ泣きなんかしてられないわよ。頑張つて調べよう。きっと何か見つかるわ」

希「ハイ！母さん」

二人は、資料調べを再開する。

二人は、懸命に資料をチェックし、お互いに確認しあう作業が延々と続いた。

徐々に二人を夕日が赤く染めていく。それは、恩人である一夫を助けたいという二人の熱い思いから発せられる光に、事務所全体が包まれていくようであった。

○法律事務所（昼）

孝子はデスクに座っている。

塩沢と里美、土井と一夫がソファに座っている。

塩沢「どういふことなんだ、松本君」

孝子「先生、すいません。重大な報告があるのです」

塩沢「重大な報告？」

里美「何が重大か知りませんが、私は、十四時から重大な会議があるの」

孝子「お忙しいのに、申し訳ありません。この事務所に大事な連絡が入るので、皆さんに集まって頂きました」

里美「刑事さんまで呼んで、まるで安物のサスペンスドラマね」

土井「まあそう言わずに、松本先生からの連絡で、本日は伺いました。それに、自殺を図ってまで、訴えようとするお兄さんのひたむきさに、何か感じるものがありましたね」

里美「フン、何言っているのよ。刑事のくせに」

孝子「それでは、土井さん、由佳ちゃんの事件を簡単に整理したいのですが」

土井「分かりました」

塩沢「その件は、すでに事故として処理されている。今更蒸し返す気なのか！」

里美「私忙しいんです。（塩沢に）先生、帰りましょう」

里美が立ち上がる。

孝子「里美さん、今日でこの問題を終わらせることをお約束します。あとほんの少しお付き合いです」

塩沢「里美さん、わざわざ来たんだから、もう少し、聞いてみましょう」

里美「本当に迷惑な話だわ」

里美が渋々座る。

孝子「土井さん、お願いします」

土井が領いて、手帳を見る。

土井「今年の3月12日16時20分から17時15分の間に、由佳ちゃん四歳は、蓋の空いた浴槽に入り、溺死。母親の里美さんは在宅でしたが、娘の行動には気付かなかった。父の一夫さんは、工場に休日出勤していたため不在。由佳ちゃんには、発達障害があり、現場の状況により不慮の事故として処理。以上です」

孝子「ありがとうございます。（一夫を指して）父一夫は、由佳ちゃんの水を異常に怖がることから、自ら浴槽に入るとは考えられず、故意に浴槽に入れられたと主張しています」

一夫「里美、お前が、由佳を殺したんだ（静かに）」

里美「これ以上、気が狂った人の世迷言に、付き合っていられないわ。孝子さん、何とかしなさいよ！」

塩沢「松本君、こんな言い掛かりをつけるために我々を呼んだのか。不愉快だ！」

孝子「先生、大変失礼しました。（一夫に）兄さん、余計なこと言わないで！」

一夫「・・・！」

孝子（塩沢に）本当に、事故だったのでしょうか？」

塩沢「これは、明らかに事故です。浴槽に水が入っていることを認識せず、いや由佳ちゃんは認識できず、誤まって浴槽に落ち、異常に水を怖がるためパニックに落ち入り、溺れたと考えるのが自然じゃないのかね。浴槽の蓋が空いていたのは、里美さんの不注意であったが、不幸な事故であったことは間違いない。（里美を見て）ご家族の方には改めて心からお悔やみ申し上げます。（頭を下げる）」

里美が、塩沢に頭を下げる。

一夫は憮然としている。

孝子「なるほど、そう考えるのが自然ですね」

一夫「・・・！」

孝子「警察の見解も同じですね」

土井「（頷いて）そうです」

孝子「事故当時の状況を詳しく調べて、私も、そう思いました」

一夫「そんなことはない！孝子、お前！」

孝子「兄さん！（一夫を制する）」

塩沢「うむ、お兄さんを納得させるために、もう一度関係者を一同に集めたということか。さすがだな」

里美「（一夫に）あなたが、一番信頼している妹に説得されたら、もう、ぐうの音も出ないわよね」

一夫が苦渋の表情。

里美「あんたのその顔を見て、すっきりしたわ。それでは、気持ち良く会議に行つて来ますわ」

孝子「里美さん、このお話をするのは今日だけですから、もう少しだけ聞いて頂けませんか」

里美「仕方ないわね。もう少しだけよ」

孝子「先日、兄が自殺を図りました」

里美「狂言じゃなかったの」

一夫が里美を睨む。

孝子「その時、私は後悔しました。そして、感じたのです。兄が死をもって、私に助けを求めていると。そのことを娘の希に教えられたのです」

一夫「希！」

里美「娘？」

孝子「それから、兄の部屋にあった調査資料を、徹底的に調べました。そして気付いたのです。重大なことに」

塩沢「重大なこと？何だ、それは」

孝子「事故には、証人がいたのです」

塩沢「証人？誰なのだ、その証人は！」

里美「証人なんかいないわよ。部屋には私と由佳の二人しかいなかったのよ。事故を目撃するなんて不可能だわ」

孝子「そのことが、部屋に二人しかいなかったことが、決定的な証拠なんです」

塩沢「君の言っていることがよく分からん」

孝子「土井さん、里美さんの供述を教えてください」

土井「分かりました。（手帳を見ながら）仕事の連絡に対応している時、由佳ちゃんが勝手に服を脱いで、浴室に行き、溺れたと供述されていますね」

孝子「里美さん、間違いありませんね」

里美「そうです。それを見逃したのは、私の不注意ですが」

孝子が机の上の日記を手に取る。

孝子「ここに兄一夫の育児日記があります。読んでいて涙が出るほど愛情あふれる日記です」

塩沢「その感動的な日記が、事故を目撃した証人だといふのかね」

孝子「先生、その通りです。この日記は事故を目撃しています」

塩沢「バカらしい。弁護士ならもっと論理的に話したまえ」

里美「やっぱり、あなたもおかしいわよ」

孝子「この日記は、由佳ちゃんが生まれてから、亡くなるまでの詳細な記録です。（その日記をめくって）いつ目が空いたか、いつハイハイできたか、時間まで詳細に書いてあります。な

るほど普通の赤ちゃんよりかなり遅いですが、緩やかに、でも確実に成長する様子が毎日記録されています。障害が分つてからの582日分の日記には、治療の詳細な記録もあります」

里美「それがどうしたのよ」

孝子「里美さんは、由佳ちゃんが勝手に服を脱いでと供述しましたよね」

里美「ええ、事実ですから」

孝子「この育児日記は、その事実を明確に否定する証言をしているのです」

土井「先生、日記が証拠になるんですか？」

塩沢「・・・！」

里美「日記なんて、証拠にならないわよ！」

一夫「(孝子に)俺の日記が、証拠になるのか」

孝子「ええ。この日記は、毎日の記録です。そして、この日記には、四歳の由佳ちゃんが自分で服を脱いだ記述は一行もありません。そうです。勝手に服を脱いだ由佳ちゃんは存在しないと、この日記ははっきり証言しているのです」

里美「(動揺を隠して)偶然ということもあるわよ」

孝子「この日記に加えて、ここに由佳ちゃんをずっと治療してきた原口医師の診断書があります。4歳の段階で、障害のある由佳ちゃんは、自ら服を脱ぐことができないと診断しています」

里美「何言っているのよ。そんなもの証拠にならないわ。ねえ、先生」

塩沢「・・・」

沈黙

『リン、リン』デスクの電話が鳴る。

孝子「はい、松本法律事務所です。お待ちしております。はい、そうですか。はい、ありがとうございます。それでは、よろしく願います」

孝子が電話を切る。

孝子「原口先生からです。先生は、法廷で由佳ちゃんの障害、発達段階を証言するそうです。もちろん、四歳の由佳ちゃんが、

自ら服が脱げないことも証言してくださいませ」

塩沢「・・・(苦い顔)」

里美「子供ですよ。それも障害がある子供よ。何するか分からないわよ」

孝子「障害があるからこそ、この診断が成り立つのよ」

里美「ふん、ばかばかしい。ねえ、先生」

塩沢「(首を横に振りながら) 里美さん、なぜ黙っていたのだ。由佳ちゃんが一人で服を脱げないことを」

里美「自分で服が脱げるかどうかなんて関係ないわ。事故は、事故なんだから」

孝子「部屋には、あなたと由佳ちゃんしかいない。あなたが脱がさなければ、由佳ちゃんは裸になることができない。そして、水を恐れる裸の由佳ちゃんを、浴槽に沈めることができたのは、あなたしかいないんです！」

里美「私じゃないわ！」

孝子「あなたと由佳ちゃんの二人しかいない、この事実が決定的な証拠になるんですよ」

里美が塩沢を見る。

塩沢「(力なく首を振っている)・・・」

里美「ふん、服も脱げないくらいの障害がある子供に、生きる価値があるというの！これからの辛い人生を考えたら、むしろ早く死んだ方が幸せなのよ！」

一夫が里美を殴る。

孝子「兄さん！」

土井が、一夫を抱える。

土井「止めなさい！あんたが、殴る価値はない！」

一夫「俺の、俺の宝物を！由佳は俺の娘だ！」

里美「役立たず！自分の子供じゃないくせに！」

塩沢、土井「！」

一夫が、必死に里美を殴ろうとするが、土井に抱えられ動けない。

一夫「血など関係ない！由佳は俺の娘だ！俺の大切な家族なんだ！」

土井「（一夫を抱えながら）分かる。あんたの気持ちは分かるよ」
孝子「兄さん……」

一夫が土井に押さえられながら、泣き崩れる。

土井「（泣きながら）俺にも娘がいる。あんたの気持ちはよく分かる」

一夫「由佳……由佳……」
痛ましげに見る孝子、塩沢。

土井「あとは、お任せください」

孝子「お願いします」

土井「それでは、署までご同行願えますか」

里美「今から大事な会議があると言っているじゃありませんか。その会議で、私の人生が決まるのよ」

土井「事情は、署でお伺いします」

里美「先生、何とかして下さい」

塩沢「（首を横に振る）私も同行しますよ」

里美がうなだれる。

塩沢が優しく里美を立たせる。

土井が里美を同行し、塩沢も一緒に出口に向かう。

孝子「お姉さん」

孝子の呼びかけで、里美が立ち止まる。

孝子「お姉さん（優しく）母親なら、少しは由佳ちゃんのことを

思い出してあげてね」

里美がゆっくり振り返る。

今までの強気の仮面がはがれ、哀れな母の顔が見える。

里美「（独り言のように）……由佳はね、服を脱がしている私の目を見て、ニコッと笑って、こう言ったのよ」

孝子「……」

一夫「……」

里美が、幼子のように小さく手を振る。

里美「バイ、バイ」

一同「！」

凍りついた沈黙。

一夫「由佳は、分かっていたのか……」

里美「あの子は、私の、心を見たのよ……天使のような笑顔で」

一夫「天使の笑顔……」

里美「怖かった……あの子の笑顔が怖かったの……(苦痛に顔を歪める)今でも、あの笑顔が、私を苦しめている……」

孝子「どうして、由佳ちゃんを……」

里美「思い通りにならないあの子が疎ましくて、いつも緊張して生活していた」

一夫「里美……」

里美「あの日、仕事の連絡にイラついて、由佳を激しく叩いたの。

あの子は、泣きもせず、じっと、私を見ていた……凍りついた瞳で」

孝子「凍りついた瞳」

里美「その目を見た時、私の……私の心が、壊れたのよ」

里美が、じっと、自分の手を見る。

里美「私は……(後悔の念がこみ上げてくる)私は、何てことをしてしまったんだろ。もう……もう取り返しがつかない」
里美が手で顔を覆い、嗚咽する。

一夫「ああ……由佳、由佳……」

一夫が哀しみに沈んでゆく……

一同痛ましげに一夫を見る。

土井が、優しく一夫の肩に手を置く。

土井「由佳ちゃんの『魂』は、あんたを、きっとあんたを見ているよ」

一夫が、白い小石を取り出し、握りしめる。

一夫「由佳を感じる……」

土井「天の裁きは、あるんだな……」

一夫「……」

塩沢が、里美の肩に手をかける。

塩沢「里美さん、私に、君の弁護を任せてくれないか」
小さく頷く里美。

土井「(塩沢に) 行きましようか」

土井と塩沢が二人で、里美を玄関に連れて行き、一夫の哀しみから逃れるように退場する。

孝子が、三人を見送る。

哀しみの静寂。

孝子が一夫を労わるように、肩に手をかける。

孝子「……終わったわね」

一夫「由佳……」

一夫が、ゆっくり立ち上がり、天を仰ぐ。

孝子が、由佳を悼み黙とうする。

一夫「(天を仰ぎながら) 由佳を感じた時、生きていて良かったと思っただ……」

孝子「兄さん……」

一夫「孝子、ありがとう」

孝子「私じゃないわ」

一夫が孝子を見る。

孝子「希が、必死で兄さんを助けてくれたのよ」

一夫「希？」

孝子「(笑いながら) 頑張ったのよ、彼女。希がいなかったら、とても兄さんを助けられなかった。今回は、正直言って、娘に負けました。完敗だわ」

一夫が孝子をじっと見る。

一夫「孝子、お前に、娘は、いない」

孝子「冗談は、明日にしてよ。希よ、兄さんのことが大好きな希よ」

一夫が孝子を痛ましく見る。

その視線に動揺する孝子。

一夫「冗談じゃないんだ。お前に娘はいないんだ」

孝子「(首を振り否定する) 兄さんの言っていることが分からない。希は、ずっと、ずっと一緒にいるわ」

一夫「真剣に聞いてくれ!俺は、お前に嘘はつかない」

孝子は、一夫の真剣さに激しく動揺。

一夫「俺は、知っていた。子供の頃から、お前の中に、もう一人のお前がいることを」

孝子「何、何言っているのよ」

一夫「それが、きつと希なんだ」

孝子「嘘!そんなの嘘よ!」

一夫が辛そうに否定する。

孝子「希は、私の娘よ!間違いなく私の娘なの!」

一夫「(辛そうに) だったら孝子、希に会わせてくれ」

孝子「希、希、出てきなさい」

孝子は、希を呼びながら、奥へ行く。

奥から、孝子の叫び声が聞こえる。

孝子「どこ、希、どこにいるの!希」

奥から飛び出してくる孝子。

孝子「希ーッ、希ーッ」

叫びながら、必死で部屋中を捜し回る孝子。

孝子「兄さん、希がいないの。私の希がーッ」

一夫が激しく動揺する孝子の肩を掴む。

一夫「お前はいつ結婚した?」

孝子「?」

一夫「いつ出産したんだ?」

孝子「!」

一夫「何時から、希といるんだ?」

孝子「・・・ずっといる・・・え?!!!! (悲鳴) 子供の時から、ずっといる・・・」

一夫「そうだ。希は、お前の娘じゃない」

孝子「!!!」

一夫「原口先生に、お前の症状を話して相談した」
孝子「？」

一夫「先生は、お前の生い立ちを確認して、『解離性同一性障害』と診断した」

孝子「何よ、それ？」

一夫「俺たちは、母親に虐待され、耐え難い苦しみの中を生きて来た。その苦しみの中で、お前の心の中に、もう一人のお前が生まれたのだ」

孝子「・・・」

一夫「お前は、一人では背負い切れない苦しみを、希と分かち合いながら、生き延びて来たのだ。希は、残酷な運命の中で生まれ、過酷な人生を生き、今もお前の心の中にいる・・・」

孝子「心の中・・・」

一夫「そうだ。希は、お前の心の病なのだ」

孝子が激しく動揺する。

孝子「心の病?!」

一夫「そうだ・・・だから、どんなに辛くても、お前は希と別れなきゃならない」

孝子「別れたくない!」

一夫「お前記憶が飛ぶことがあるだろ」

孝子「・・・」

一夫「仕事の連絡ミスが続いていないか」

孝子「・・・」

一夫「このままじゃ弁護士を続けられないぞ」

孝子「弁護士なんて止めてもいい!」

一夫「そんな問題じゃない!脅迫のFAXを送ったのは、希だろ。」

希は、お前の知らないことをしている」

孝子「そ、それがどうしたのよ」

一夫「孝子、今はつきり言う。母さんは突き落とされたんだ!」

孝子「そんな・・・」

一夫「孝子、これからは、お前自身の人生を生きるんだ」

孝子が激しく泣き崩れる。

一夫が孝子を抱きしめる。

孝子「希——!希——!」

一夫が、優しく孝子の肩を持ち、自分の方を向かせる。

一夫「孝子」

孝子が泣きながら、一夫を見る。

一夫「(じつと孝子を見つめて) 孝子、俺の願いを聞いてくれ」
孝子「願い……」

一夫が、手を付いて、孝子を見る。

一夫「孝子、頼む！お前が、お前の心の中の希に会って、御礼を
言ってくれないか」

孝子「御礼……」

一夫「お前を守り、ずっと私を助けてくれた希に、お前が直接御
礼言ってくれないか。お前しか出来ないんだ。孝子、頼む」

一夫が頭を下げて、孝子に頼む。

孝子「兄さん……」

頭を下げて懇願している兄をじつと見つめる孝子。

一夫「(深く頭を下げて) 頼む、孝子」
孝子「……」

一夫「他に方法は、ないんだ！」

思い詰めたように一夫を見つめていた孝子の視線が、ゆっ
くりと上がる。

暗転。

一条の光の中に、孝子が浮かび上がる。
希が登場する。

希「母さん」

孝子「希」

希「母さん」

孝子「希ありがとう！お前が大好きな伯父さんも大喜びだった」

希「嬉しい！伯父さんが喜んでくれたのが一番嬉しい。でも母さ
んが頑張ったから真実が分かったんだ。母さんの力だと思っ
よ」

孝子「弁護士は母さんの天職よ。お前が思っている以上に母さん

は、優秀なのよ」

希「そうかな？ 大学に来ないかと誘われて、あんなに喜んでいたじゃない」

孝子「あれは、敵の目をごまかす仮の姿よ」

希「(笑いながら) ホントかな？」

孝子「まあ、少しは喜んだかな」(笑い)

希「ほら、本音がでた」(笑い)

孝子「(希を見つめて) 私は、ずっとお前に助けられてきた」

希「何を急に改まって。怖いじゃない」

孝子「こうやって、じっとお前を見つめていると、はっきり分かる。お前は、ずっとそばにいてくれた。苦しくてどうしようもない時、私に変わって、苦しみを受け止めてくれた。今は、はっきりわかる。お前のお蔭で、生き延びたんだ。お前は私の命の恩人。希、ありがとう！」

孝子が希に頭を下げる。

希「母さん、ありがとう。母さんから初めて認められた気がする。

私こそ、母さんのお蔭で生きて来たんだ。私の幸せは、母さんと一緒に居ることなんだ」

孝子「そう言ってくれて嬉しい・・・でも、もうそれはできないのよ」

希「なぜ！ 私は母さんと、ずっと一緒に居たい。一生一緒に居たい」

孝子「(首を横に振り) それは、できない。もうできないのよ」

希「どうして、どうして一緒に居られないのよ」

孝子「希、お前は母さんの心の中で生きているのよ。もう二人では、生きていけないの」

希「いや、私は死にたくない。母さんとずっと一緒に居たい」

孝子「(泣きながら) できないのよ。それは、できないのよ」

希「母さん、私を見捨てないで。小さい時から、ずっと二人で苦しんできた、ずっと二人で耐えてきた私を、見捨てないで」

孝子「できない。二人一緒に生きることがもうできないのよ」

希がキッと孝子を見る。

希「だったら、私が生きて、母さんが死ねばいい」

孝子が一瞬考える。

孝子「そうだ！お前を失うぐらいなら、その方が楽かもしれない。
お前が生きて」

希「(泣きながら、) やっぱり、母さんには冗談が通じない。そんなことできる訳ないじゃん。私は、母さんの心の中でしか生きられないんだよ。そんなこと、とっくに分かっていたわよ」

孝子「ごめんね、希。私の希。大好きな希。お前は私の宝」

希「うれしい！もつと言って、母さん。うれしい・・・うれしい・・・」

孝子「ありがとう、希。私の希。私の大切な希・・・」

希「うれしい、うれしくて、涙が出て、周りが見えなくなってきた・・・私もう死ぬのかな・・・」

孝子「やっぱり、あなたを見捨てられない！あなたは私の命よ！」

孝子が希を抱きしめる。

希「うれしい・・・」

孝子が希を強く、強く抱きしめる。

希「うれしい・・・やっとな母さんに抱いてもらった・・・」

孝子「ごめんね、希」

希「母さん、あやまらないで、私は嬉しいのよ」

孝子「生きてくれて、ありがとう、希」

希「さよなら、お母さん・・・」

孝子「(言葉にならない) ありがとう、ありがとう、ありがとう・・・希。私の希・・・」

光の中で固く、固く抱き合う二人。

希が光の中を、昇天していく。

静かに、静かに暗転。

松本法律事務所は、哀しみの静寂に包まれている。

一人うずくまっている孝子。

一夫は、少し離れて孝子をじっと見つめている。

孝子が静かに目を開けた。

一夫が孝子に近づき、労わるようにひざまずく。

一夫「孝子……」

孝子「行ってしまった……私の希が行ってしまった」

一夫「そうか……」

そつと、肩に手を置く。

一夫「哀しいな……」

孝子「辛い……」

孝子の目から涙が流れている。

希はもういない！胸が締め付けられるような寂寥感が襲ってきた。

孝子「ああ、もう一人では生きて行けない……」

その言葉を聞いて、一夫が優しく孝子を見た。

一夫「由佳を失った時、俺もそう思った」

孝子「兄さん」

一夫「大切な家族を失ったんだからな」

孝子「大切な家族……」

一夫「ああ、かけがえのない家族だ。でもな、由佳の事件が解決した時、由佳の魂を感じたんだ。由佳との思い出、由佳を抱いた温かさや、手の感触が甦った時、本当に生きていて良かったと思っただけ。由佳に生きてくれ、と励まされている気がしたんだ」

孝子は、自分の手を見た。その手には、まだ希を抱きしめた感触が残っていた。静かに目を瞑り、もう一度希を抱きしめてみる。

その時、一夫には、まるで孝子が自分自身を、慈しむように抱きしめているように見えた。

孝子は、腕の中に、柔らかく温かい希の体温を感じた。その時だった。鮮明に希との思い出が甦ってきた。虐待を二人抱き合いながら耐えた日々、兄のために証拠集めに奔走した日々、数々の思い出が、家族写真のように甦って来た。そしてなぜか最後に、冗談を言い合って笑っている希の笑顔が浮かんできた。胸を締め付ける笑顔だった。孝子は、愛おしさのあまり、腕の中の希をつよく、つよく抱きしめた。

その時だった。心の中で希の声が、はっきり聞こえてきた。

『うれしい、母さんは私の分まで生きて』

ああ、私の愛おしい娘の希、ありがとう。孝子の目から涙がこぼれ落ちた。そして、希が望んだように、私は、強く生きようと決心した。『私の希』が望んだように。

孝子は立ち上がり、兄一夫の目を見て言った。

孝子「兄さん。希が、私の分まで生きて、と言ってくれた」

それを聞いて、優しい笑顔だった一夫の顔が、ぐにやりと崩れて、涙が溢れた。

一夫「そうか、そうか、希は、そう言ってくれたのか。やっぱり

希は、お前の娘だったんだ。かけがえのない家族だったんだ」

孝子「かけがえのない家族……」

もう会えない家族……これからは希のいない人生がはじまる。

一夫「俺たちは、もう十分苦しんだ……」

孝子「兄さん」

一夫「でも、希や由佳は、俺たちの心の中に、大事なものを残してくれました」

孝子は、大きく頷いた。そうだ、希は、生きる希望を心の中に残してくれた。そして……

孝子「そして、ずっと見守ってくれている」
一夫「だから、俺たちはもう一度支え合いながら、前を向いて、生きて行こう」

孝子が、もう一度深く頷いた。

孝子が、ゆっくり天を見上げる。

孝子「希・・・私の希・・・今まで、ありがとう！」

終